

医王山で遭難か

の
会社役員
金 沢

林道入り口
に社有車

県警へリも捜索

二十四日午後十時、え、
金沢市十間町一〇、会社役
員達磨さん(四〇)が「医王
山へ行く」と言ったまま戻ら
ない」と家族が金沢中署
に届け出た。同署は達磨さ
んが遭難した可能性が高
いとみて、二十五日早朝か
ら同署員や地元消防団員
ら約五十人と警察犬が出
て現場付近を捜索してい
るほか、県警へリ「いぬわ
し」も空からの捜索を行っ
ている。

達磨さんは白のＴシャツ
に青と赤の縞のジャージ
姿で、青色スリッパを履いて
ミッキーマウスの帽子をか
ぶっており、青色のリュッ
クバックに水筒、ガイドブ
ックを持っていたという。
達磨さんは二十四日午前
九時ごろに同社の社有車で
自宅を出発したが、同日午
後九時ごろになっても帰宅
しないため、妻が医王山付
近を捜索した結果、この
社有車が同市表町の林道
入り口付近の駐車場(標
高五百〇〇)で発見された。
達磨さんは登山の経験は
なく、一カ月くらい前から
家族に「白山へ登りたい」
と話しており、手始めに医
王山の登山を思っていたら
しい。

医王山で不明 の男性保護

「医王山へ行く」と二十
四日朝に自宅を出たまま行
方が分からなくなっていた
金沢市十間町、会社役員達
磨さん(四〇)は二十五日、
高岩(とんびい)下の三
蛇が滝付近(標高約七五〇
メートル)で下山途中のところを
登山者に発見され、無事保
護された。達磨さんは同腕
などに怪しいが、達
磨中署の調べでは、達
磨さんは二十四日午後十時

ら道に迷ったらしい。若
下でじっとしていた」と話
しており、比較的元気だ
という。達磨さんが保護され
た場所は、二十四日夜に達
磨さんの会社所有の車が発
見された林道入り口駐車場
(標高約五〇〇)から約
七キロ離れたところだ。



「夕刊に載っている遭難者の達磨さんは、19期
達磨 知香さんの旦那さんのことではないだろ
うか？」

との情報が事務局に入ってきたのは、25日夜の
ことでした。

遭難対策については何ら話も煮詰まっておら
ず、現役は夏合宿中とあって、ただ狼狽するの
みでしたが、とりあえず達磨さんと同期の堀氏
に連絡をいれてみました。

すでに堀氏には遭難の件は伝わっており、彼
のまず中署へ連絡して現況把握を、の処置によ
り、もう無事救助されていることがわかりまし
た。＜どうしたらいいのだろう＞の事務局長の
パニックも短時間で消沈することになりました。

遭難対策―現役のサポートとといえば、第一に
予想されることながら、山離れしているOBに
そのうえ救助なんて…と、結局話は進まず…。
さしあたりの合意は、OB会そのものが確立し
てから。避けるわけではないが、時間をかけて
話し合っていこうのあたりでした。

今度の事件では、「遭難は当然、山の現役で
ある現役側におこること」といった私達の認識
の盲点をつかれました。むしろ組織から離れ、
山の姿に気付かず、昔のままの判断をひきず
っているOB側に、遭難の可能性は高いともい
えるのです。

そして、遭難の報で私にパッと浮かんだのは
やはり現役でした。彼等には組織があり、山の
現役であり、捜索活動に加わってもらう可能性
はずっと高いのです。では誰が発令するのか、
誰が要請したことへの責任をとるのかなどとい
われると困ってしまいますが、お互いに誠意を
出しあえる関係でありたいと願うばかりです。

上記のような意図がありまして、達磨さんに

原稿をお願いしました。ある種の忘れたい気持ちや整理のつかないお気持ちもあったようですが、しつこくお願い（で、最後のページにまわってしまった）して、書いていただきました。

無事救助をお喜びするとともに、夏には指導員つきの白山登山の企画がいくつもあることであり、是非「子供達と白山に登りたい」初志を貫徹されて、山の素晴らしさの方を味わい直されていただきたく思います。

夫の遺愛箱

19期 達磨 知香

「やっぱり、おかしい！」

で、この出来事が始まりました。それは、8月24日の夜のことでした。夫が

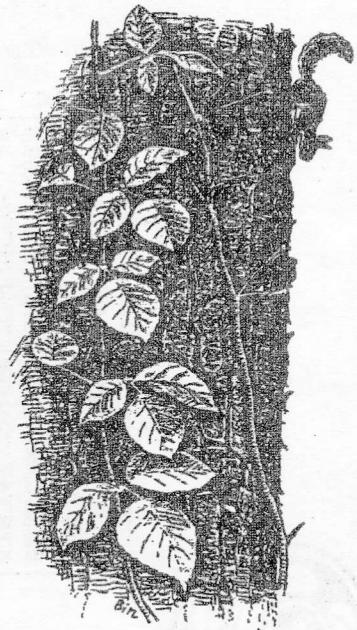
「医王山へ行ってくる」

と言って、朝9時にでかけたまま帰ってこなかったのです。

いつもは日曜日になると家族揃って出掛けるのですが、この日は私の勤務先の小学校でバーベキュー大会があり、子供達も連れて行くということで、主人一人が暇になりました。主人は常々「白山へ子供達と登ってみたい」と言っていました。何しろ京都生まれの京都市育ち。自分も登れるか自信がなく、まず医王山に登ってみようと考えていたのです。それで、一人で家にいるよりは、天気もいいことだと、でかけることにしたのです。私は医王山ぐらい、地図なしでも軽々と歩けると思っていたので、「行ってくれば？」

と言っただけでした。ワングル時代に学んだことを、すっかり忘れてしまっていたのです。あの時もっと詳しく調べたり、教えてあげればこんな事にはならなかったと、何度悔いたかわかりません。初めての山へ一人で入る恐ろしさを全く気付かずに行ったのです。

夕方6時になっても帰って来ず、ちょっと遅いなあと思いました。が、主人は疲れるとどこ



「ツタのからまる木で」イラスト：竹中 敬

自然人29号より

でも昼寝をしてしまうので、車の中で寝ているのでは…とも思いました。その頃は7時頃までまだ明るかったので、＜寝ぼすけめ！＞なんて楽天的に考え、暗くなると危ないのになと、やや気掛かりな程度でした。

8時を過ぎて、さすがにもう真っ暗。遅いなあ。早く帰ってくればいいのに…。

8時半を過ぎると、いくらのおんぴり屋の私でもさすがに「やっぱりおかしい！」「何かあったかも」と心配になり、見に行くことにしました。＜もし車の中にいなかったらどうしよう＞と不安ながらも、子供達を祖母に頼み、でかけました。

途中本当に不安でした。アクセルを踏んでもなかなかスピードがあがらず、どうして速く進まないのかとあせる一方で、何かがおきていたらどうしようと確かめたくないような気持ちもありました。

見上峠にやっと着きました。その辺りに車はありませんでした。何かホッとした気持ちになり、さらにキャンプ場（医王の里）まで上がってみました。辺りは暗く、静かです。卒業以来

来たことがなかったので、こんな所あったかなあ？変わったみたいだなあと思いながらも、車が見つからないということは、もう下山しているということだといいい方に解釈し、ちょっと安心し、ひと周りして帰ることにしました。

ところが、見上峠まで戻り、バス停近くのちょっとした道の所で念のためと、曲がってみると、何と主人が乗っていった車がボツンとあったのです。ええっ！どうしてあるの！？主人がこの真っ暗な山の中に一人であることを否定したい気持ちで一杯になりながら、急いで覗きこみました。いないのです。鍵のかかったままの車をガラス越しにのぞいても…やっぱりまだ山の中にいるんだ！否定したくて、何度覗き直しても、やっぱりいません。「バパー」と叫んでみても何の応答もありません。

「どうしよう…」思いついたのは、とりあえず家に電話することでした。電話のある所まで少し下りて、家に電話しました。

「いないよ。どうしよう…」

というのが精一杯でした。

「まあ、とにかく帰ってこい。」

という父の言葉にうなづきながら

「もう一回確かめてきてから帰る。」

とやっと返事をして、また見上峠まで戻りました。さっきと同じでした。しーんと静まりかえった中に車が一台ボツンとあるだけでした。やっぱり山の中なんだ…動かぬ事実がやっと納得できた気になりました。

家に戻ると、親しくしている近所の人がかけてつけていました。「どうだった？」と聞かれて、思わず泣いてしまいました。それでも家の中に入ると＜私がしっかりしなくちゃ＞と緊張感がみなぎってきて、＜私が探さなければ＞の覚悟もできました。でも一人では不安なので、主人の義兄と近所の人と、三人で行くことに相談しました。その時はまだ、自分達だけで探そうと思っていました。



しかし、母は

「一応、派出所に届けておいたら？」

と言って、でかけていきました。戻るまでの間に、私は子供達に

「パパが山へ行ったきり帰ってこない」ことと、

「パパを探しにママがでかけている間、おばあちゃんの言うことをよくきいてね」

をくり返し言ってきかせ、寝かせました。一番上が小三、下が二才という子供四人なので、心配でしたが、そんなことはいってられません。＜とにかく探しに行かなければ＞という緊張感で張り詰めていました。

なかなか母が帰ってこないなと思っていたとその母から電話がかかってきました。

「いろいろ聞かれるので、派出所まで来るように」

ということでした。すぐ行くと

「どうして一人でいったのか」

を、とにかくしつこく聞かれました。どうしてなのか初めはよく分かりませんでした。自殺を疑っているのだとようやく分かり、

「そんなことはないと思います」

と答えていました。

「とにかく、私達で探しますので」

というと

「こういうケースは初めてなので、中署に連絡してみます」

そうして、私が中署へ出向かねばならないことになり、近所の人と中署へ行きました。そこでも自殺の疑いはないかと何度もきかれました。

署の人に

「捜索隊を出さないといけない」

「警察犬を頼みなさい」

「猟友会の人を二人程お願いして、出てもらってください」

とされました。

＜あの…そんな大袈裟にしないで…＞と、医王山ぐらいて遭難騒ぎなんて、ちょっと恥ずかしいという気持ちが、その時までは、正直いってありました。けれども、もうそんな恥ずかし

がってなんかいられない、警察の言われる通りになくては、と思ひ直しました。

深夜の11時に、警察の方と見上峠で待ち合わせ、主人の乗ってきた車を教えました。何か手掛りはないかと覗きますが、何もありません。警察の方が車で一回りをされ、私達の方は中署に戻り、次の日の打ち合わせをしました。

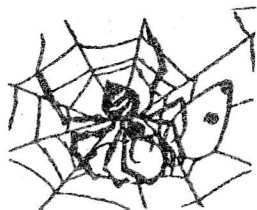
警察犬と医王山の消防団へは警察から、猟友会へは翌早朝父から連絡をいれてもらい、5時集合となりました。朝の弁当のお握りを作ったり飲物を用意したりすると、もう夜中の3時になっていました。

4時には家を出なくてはならないので、30分だけでもと部屋へ休みに行きました。いつもならぐっすり眠っている長男がむくっと起きて「見つかった？」

と小さな声で聞きます。その言葉に涙がこぼれました。

「朝になったらまた探しにいくから、心配しなくてもいいよ。」

と言って、寝かせました。



すぐ時間になり、見上峠に4時半に着きました。約束の5時になっても警察がなかなか来ず、イライラしました。やっと来て、まず車で林道沿いに見てまわることになりました。

車でどんどん登れるようになっていたのにはびっくりしました。朝日がとてもまぶしかったのが今でも思い出されます。大学時代の医王山とはすっかり変わっていました。もっと下調べをして送り出せばよかったと、またも後悔がこみあげてきました。

それから少し山道に入ってみました。藨岩の方が気になりましたが、警察犬の邪魔になってはいけなないので、一旦集合場所へ戻りました。こんな時だけど、久しぶりの山道をとて懐かしく思いました。この頃にはもう居直ったように落ち着いてしまいくっきりしなくてはと

ばかり思っていました。

警察犬、消防団、猟友会、警察が集まるのに時間がかかりました。早く探しに行きたい気持ちを押さえながら

「ありがとうございます。」

「ご迷惑をかけてすみません。よろしくお願いします。」

と一人一人に挨拶してまわりました。町内の消防団の方々にも来ていただき、申し訳なく感謝していました。そうしているうちにやっと捜索が開始されました。ふと、同期の梅君にお願いしようかなと思いましたが、まあすぐみつかるだろうし、こんなに大勢の方がおられるのだからと、打ち消しました。

私は警察犬の後ろを歩きました。他の方は4方面ぐらいに分かれて（確かではなく、ぼうっと聞いていた）探しに行きました。警察犬が何度も行ったり来たりをするのには閉口しました。それでも白元の山頂に着き、ホッとすると、主人もここまでは登ったのかなと思いました。手掛りもなく下りることになりました。その時、右手のブッシュの中に藨岩の方向を示す標識がありました。私はそちらが気になりましたが、「ブッシュがひどいから元の道に戻りなさい」という指示にうなずくしかありませんでした。その時は気が張っていたせいか自分でもびっくりするくらい足が前に出て、歩けました。人間って気持ち一つで頑張れるものだなと感心したりもしました。

下りてからまた林道沿いに車で回りました。いっこうに何の手掛りもありません。

お昼近くになっても何の連絡もなし。＜捜索隊の方々の昼食を用意しなくては＞と、気を回しながらも、＜どうして見つからないのだろう＞と不安が大きくなり始めていました。

とにかく暑い日で、みなさん汗だくでした。私も昨日来の睡眠不足と暑さで、だんだん疲れてきました。

昼からも車で林道を走りました。＜捜索隊の

方々が頑張って探し続けて下さっているのだから大丈夫。私はとにかくしっかりしていなくてはと自分を励ましながらも、なかなか情報が入りません。くもしかして…>がふっと浮かんできては、くいや、絶対見つかる>と信じようと思いました。

天候が急変し、雨が降り始めました。車の中でついうとうとしてしまいました。何か外が騒がしい…くもしかして>と外へ出てみると、「見つかった」という情報が入ってきたのでした。探していただいた方々への感謝で一杯になってしまいました。

こうして、夫の遭難は無事救助で終わりました。

夫に「どこで迷ったのか」と聞くと…
白元の山頂まではふうふう言いながら登り、帰る時、もう疲れたので林道に下りて歩こうと思った。地図を見て、上りと違う道を選んだのが間違いだった。結局沢を下りることになり、どんどん下って滝（編者注：白姫滝か？登山道は途中から沢を離れ、左岸岩壁につけられている箇所です。通常ここまで沢沿いには進めません。今年は異常渇水で流量が少なく、途中の分岐に気付かぬまま沢をたどってしまったようです）まで来てしまった。もうどうしようもなくなりそこでずっと立往生していた。一晚、滝の上の枝につかまり、助けに来てくれるのを待った。夜が明けても、前は滝、後ろは沢で登り返す力もなかった。ヘリコプターの音が聞こえ、その姿は見えなかったが、自分を探しに来てくれているのだなあと考えた。随分時間がたち、急に曇ってきた。雨が降って水の量が増えてきたらもう助からない。滝を下りようと決心し、死ぬ思いで下りた。この時にでた力は、今思い返すと不思議なくらいだった。滝を下りると道が開け、蘆岩の下の所に出て、やっとの思いで三蛇の滝の下の方へ下りた。座り込んでいると、

上の方で人の声が聞こえ、思わず「助けてくれえ」と叫び、救助された。

（上記中、地名は編者が補足しました。）

大勢の方々に一生懸命探していただき、本当に感謝すると共に、山の怖さにあらためて震える思いです。私自身は、あの時ああしていればと、反省でいっぱいです。

思えば大学時代、ワングルに入った私は、主人と同じ「素人」でした。そんな私が山に登っていたのは、先輩方の教えがあったからこそなんだと、20年近くも過ぎてから気付きました。

新聞などを通じて心配して下さった方々、本当にありがとうございました。

このわずか三日後に、江口さんの訃報を知られました。二学年下の彼女とは、お正月に一里野ヘスキーに行った時、久しぶりに会っていました。その時、主人も江口さんに会っており、訃報には驚いていました。

つい三日前には、私達家族の前にも「死」がたちはだかっており、そこから生還できたばかりでした。皆さんは馬鹿げた話と思われるかもしれませんが、

「あの滝を下りる時に出了不思議な力は、もしかしたら江口さんがくれたのかな」と、主人は言い、私もそんな気がしてしまいました。

彼女のお通夜の席ではそんな思いも重なり、なかなか立ち去りがたく、心からご冥福を祈らせていただきました。

